

イツクとイツコ

我 妻 多 賀 子

一、はじめに

現代語の場合、場所について尋ねる不定称の代名詞としては、「何処（ドコ）」を使うのが一般的である。

○あなたの出身地はどこですか？

○この本のどこが面白かったか教えて下さい。

○世界のどこを探しても見つからない珍しい魚です。

○その部屋に入るとどこもかしこも汚れていた。

○身体のどこにも異常はないんだって！

右のように、ドコの指す範囲は広い場合も狭い場合もある。また、ドコは平叙文の他に、疑問文にも感嘆文にも用いられ、その伴う語も、さまざまである。要するに、ドコはきわめて用法範囲の広い語であることがわかる。

ところで、このドコに当たる古典語には、二つの形が見られる。一つは、左に記す「百人一首」の有名な歌にも使われているイツコである。

○さびしさに宿を立ち出でてながむればいつこも同じ
秋の夕暮れ

良運法師が詠んだ右の歌は、「寂しさのあまり、宿を出てながめてみると、どこも同じく寂しい秋の夕暮れであるなあ」と解釈できるので、イヅコは、現代語のドコと同じ意味で使われていることになる。「百人一首」には、もう一つ、清原深養父が作った

○夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいつこに月や
どるらむ

という歌にもイヅコが出て来る。これもまた、「夏の短い夜は、まだ宵のままであると思っているうちに明けてしまったが、雲のどのあたりに、月は宿っているのだろうか」と訳せるので、イヅコは、現代語のドコと同義であることがわかる。

その他、時代はずっと下がるが、土井晩翠、滝廉太郎コンビの作った「荒城の月」にも

○昔の光、今いずこ

の句が幾度か使われ、日本人の愛唱歌謡として、よく口ずさまれている。

以上、イヅコは何かと耳にする機会の多い語であるが、

もう一つ、イヅコの第三音節コが、クに変わっただけのイヅクという語が古典語に出て来る。

例えば、『万葉集』の「貧窮問答歌」を見ると、

○瓜食(は)めば 子ども思ほゆ 粟食めば まして
偲(しぬ)はゆ いづくより 来(きた)りしもの
そ

と書かれている。これは、子ども思いの山上憶良が、「子どもは一体どこから来たものなのか」と詠んでいるところで、原文ではイヅクの部分が「伊豆久」と一字一音書きになっている。したがって、この部分、イヅコではなく、イヅクとよめるが、意味は、現代語のドコと同じものと考えられる。また、『古今和歌集』の中に

○みちのくはいづくはあれどしほがまの浦ごく舟のつ
なでかなしも

という歌がある。この歌は古来、さまざまな解釈が試みられているが(注1)、要するに、「みちのくはどこが一番印象的かということとはともかく別として、塩釜の浦をこぐ舟が引綱でひいているところが、心にしみて、

おもしろいなあ」と訳せるので、イツクがドコの意味で用いられていることは、明らかである。

というわけで、現代語のドコに相当する古典語には、イツク、イツコの二つがあると考えられる。そこで、両語には、意味・用法上、どのような使い分けが存しているのかを、探つて行くことにしたい。

以下、まずイツク、イツコの順に、別々にその用法を見、最後に、まとめて比較考察を行うことにする。

二、イツクの用法

イツクは上代からすでに、一字一音書きの例が、『古事記』に二例、『万葉集』に三例見えている。

○この蟹(かに)や いづくの蟹(伊豆久能迦邇)

百傳(ももつた)ふ 角鹿(つぬが)の蟹 横去ら
ふ いづくに至る(伊豆久邇伊多流)

△記歌謡・四二▽

○瓜食(は)めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして
俚(しぬ)はゆ いづくより(伊豆久欲利) 来(

きた)りしものそ
△万葉・五・八〇二▽
○紅の 面(おもて)の上に いづくゆか(伊豆久由

可) 皺が来(きた)りし

△万葉・五・八〇四▽
○梅の花散らくはいづく(知良久波伊豆久) しかすが
に此の城(き)の山に雪は降りつつ
△万葉・五・八三▽

右の五例は、イツクがいずれもドコの意味で用いられ不定称の代名詞としての役割を、十分に果たしている。用法的には、助詞を伴う場合がほとんどであるが、最後の例のように、句末に用いられて、後ろに何も伴わない場合もある。

それでは、このイツクは、平安時代に入ると、どのように変わって行くのであろうか。続いて、中古の作品について、公刊の索引類などを元に、ながめてみたところ、イツクが出て来なかつた主なものは、『竹取物語』『土佐日記』『紫式部日記』などごくわずかであった。

次に、その用法を見ると、上代に出て来たような助詞ノ、ニ、ヨリを伴うものは、この時代になつても、左に記す通り用いられている。(注2)ただ、ノの場合は、いわゆる連体格を示すものばかりでなく、「のもの」の意味を有し、体言の代用をするという使い方もある。

○行きちがふほどに「いづくのぞや」と問ひたれば

△蜻蛉日記・天禄元年七月▽

○おきて行く空も知られぬ明けぐれにいづくの露のかかる袖なり

△源氏物語・若菜下▽

○あまたみゆる中に、いづくのにかあらむ、薄色着たる、髪はきばかりある、頭(かしら)つき、やうだいなにもいとをかしげなるを

△堤中納言物語・ほどほどの懸想▽

○「いかであはむ。いづくにかすむらむ。」

△大和物語・二二六▽

○「ものけ給はる。いづくにおはしますぞ。」と、かれたる声の、をかしきにていへば

△源氏物語・帚木▽

○「これはいづくに罷(まか)りて請(う)けとらんずるぞ。」

△古本説話集・下・六一▽

○しか、御耳とまるばかりの手などは、いづくよりかここまでは伝はり来む。

△源氏物語・橋姫▽

○いづくよりともなき文のいと艶なるを取り入れたり。

△浜松中納言物語・四▽

○遊女三人、いづくよりともなく出できたり。

△更級日記▽

さらに、上代に出て来たような、後ろに何も伴わずイヅクという疑問詞のまままで終わる形も中古で使われている。

○「われもやがていづく」とおもひつれど、人もこうじたりとて、えものせず。

△蜻蛉日記・天禄二年七月▽

○ははきぎの木すゑやいづくおほつかなみなそのはらはもみちしにけり

△金葉和歌集・二度本・秋・二四四▽

その他、中古に入るとイヅクは、上代では見られなかつた数多くの助詞を伴うようになる。ここでは、一つ一つ用例を挙げて行くことは省略するが、例えば、その助詞は、カ、ソ、ト、ヘ、モ、ヲなどさまざまである。各用例数はそれほど多く出では来ないが、左に記すゾ、およびモを伴う例は、量的にいっくらが目立っている。

○ふかき山にこもり給ひぬとありしはいづくぞ。

△大和物語・四三▽

○「そのかよふらむところは、いづくぞ。さりぬべからむや」といへば

△堤中納言物語・ほどほどの懸想▽

○「ここはいづくぞ」と問はせ給ふ。

△栄花物語・三八▽

○雪・霰降りしく頃は、いづくも、かくこそはある風の音なれど

△源氏物語・椎本▽

○朝の空はいづくもかはらぬものなれば

△浜松中納言物語・一▽

○いづくもこの御ひかりにあたりつるかざりはみなくれまどひたり。

△栄花物語・七・とりべ野▽

他に、中古で初めて、左のような断定の助動詞ナリを伴う例が使用されるようになる。

○昔、をどこ、みそかに語らふわざもせざりければ、いづくなりけん、あやしさによめる。

△伊勢物語・六四▽

○「いづくなりし天女ぞ」と思ひぬたり。

△宇津保物語・初秋▽

○「いづくなりつる所ぞ」と問へば

△堤中納言物語・はいずみ▽

○入道殿は「いづくなりともまかりなむ」と申したまひければ

△大鏡・道長上▽

○年来(トシゴロ)思フニ何ク也(イツクナリ)トモ将御(サテオハ)セバ、極テ喜(ウレシ)クコソハ侍ラメト

△今昔物語集・一六ノ九▽

以上述べてきたように、中古に入つて、数多くの語を伴うイツクが現れるのは、それだけイツクの用法が拡大したことを物語っていることになる。そして、この傾向は、中世から近世の作品についても言える。

中世以降も、イツクは本当によく用いられ、私が見た限りでは、『打聞集』に見られなかっただけで、あとは多かれ少なかれ、どの作品にもイツクが使われていた。その用法も、今まで述べて来たことと、ほとんど大差がない。ただ、中世に入ると、方向を表す格助詞へを伴う例が増えて来る。

○「さて、いかなる事によりていづくへおはする人ぞ」と問へば

△発心集・一ノ三▽

○何条、此御所ならでは、いづくへかわたらせ給へかんなる。

△平家物語・四・信西▽

○南の門に出て、船を遅しといそいだれば、これは、
いづくへ行くぞ。 △天草本平家物語・一▽

また、この時代になって、新しく出て来た形に、助詞
のマデを伴うイツクがある。

○いづくまでも具し奉るべけれ共、道にも敵待つなれ
ば、心やすう通らん事も有がたし。

△平家物語・七・維盛都落▽

○弁慶喜びて、大手を広げて、「憎い奴が、何処(い
づく)まで」とて追掛(おっか)く。

△義経記・四▽

○三人の者ども、かしこまって、いづくまでも行幸の
お供をつかまつらうずると申したところで

△天草本平家物語・三▽

右に挙げたように、中世になって、へ・マデがイツク
の下に続く例の増えたのは、言うまでもなく、格助詞の
へやマデそれ自体が多く使われるようになったからで、
イツクの用法が変化したためではない。その他のイツク
が伴う語は、上代・中古で見えて来たものと、同じである
結局、上代ですでにしっかりした例が存在していたイ

ツクは、以後も質量共に豊富に用い続けられ、現代に至
っていると言えるようだ。なお、これまでは、主にイツ
クが伴う語の方に着目し、その意味については見て来な
かったが、今まで掲げて来た例を見れば明らかのように
すべて、「どこ、どのへん、どのあたり」と訳せるもの
ばかりで、意味的に問題は無い。また、その使用場所は
歌、会話、心内語、地の文のいずれにもならぬの制限を
受けることなく用いられていて、これまた、特に問題と
するところもない。

右のように、用法範囲の広いイツクなので、おのずと
慣用句的用法も生まれて来ている。主なものをいくつか
挙げてみると、まず「一、はじめに」のところでも記し
たイツクハアレドという言い方がある。先述したように
これは、「どこが一番か」ということはともかくとして「
とか「他のどこはとにかく」の意になる。歌によく使わ
れ、先に挙げた『古今和歌集』の「みちのくはいづくは
あれど」の歌の外に、左のような例が見られる。

○霞とも花ともいははじ春のかけいづくはあれどしほ
がまのうら △夫木和歌抄・雑・一一七〇三▽

○子曰するいづくはあれど亀のをいはねの松をため
しにぞひく △新千載和歌集・春・一九▽

次に、イツクトモナシという語法が見られる。この場合、最後の形容詞ナシが、連用形もしくは連体形として下に来る用言や体言に係って行く用法が多い。意味的には、「どことも知れない」とか「どこへというあてもない」と解釈することが出来る。

○ふるさとはいづくともなく忍ぶ草しげき涙の露ぞこぼるる
△宇津保物語・楼上上V

○御門ニオクレ奉リケレバ、ヤガテ頭オロシテケリ。
イツクトモナク行ヒアリケケリ。

△十訓抄・上・六ノ一〇V
○朝あけの窓吹きいるる春風にいづくともなき梅がかぞする
△新拾遺和歌集・雑・一五三五V

さらに、イツクに含まれた慣用句として、イツクヲハカト、あるいはイツクヲハカリトという言い方も出て来る。ハカもしくはハカリは「計」のことで、「およその目安、見当」の意を表すため、全体では、「どこを目安にして」の義になる。この例は、左に記すように、中古・中世の物語文学で用いられることが多い。

○白雪の降りつむ野辺は跡絶えていづくをはかと君を

尋ねむ

△栄花物語・七・とりべ野V

○をどきは又もとよりいはねば、むねのさはがれつゝ、せんかたなき心のうちながら、いづくをはかとなくまかで給も、さまざまましましるはあくがれはてぬる心ちして

△在明の別・二V

○げにいかなる所にさすらふらんと、心うくおぼざるれど、いづくをはかりとたづねたまふべき方なし。

△苔の衣・四V

もう一つ、イツクニカという慣用句について、触れてみたい。この語は、イツクに、格助詞ニと係助詞カが付いたもので、「どこに・・・か」とか「どの場所に・・・か」「どこで・・・か」の意味を持つ。

○いづくにか魂を求めんわたつうみのここかしこも

おもほえなくに

△大和物語・一四七V

○爾(ナンジ)ノ家ハ安(イツク)ニカ在ル。

△大唐西域記・三・長寛元年点V

○その仏師はいづくにかある。

△宇治拾遺物語・九ノ五V

ところで、このイツクニカの第四音節が撥音便化する

と、イツクンカとなり、また末尾のカがゾに変わると、イツクニゾ、さらにそれが撥音便化して、イツクンゾとなる。これら、イツクンカ・イツクニゾ・イツクンゾは漢文訓読体の文章で用いられることが多い。その場合、イツクが「どこ」という場所を表すこともあるが、ほとんどは、左に記すように「どうしてか」とか「何としてか」の意味になり、いわゆる一語化した陳述の副詞として使われる。

○賢ニ非ズハ、安(イツクンカ)任(マカ)ス可(ベ)シ。
△文鏡秘府論・地・保延四年点▽

○焉(イツクニゾ)肯勤而行乎

△金剛般若集驗記・平安初期点▽

○美ヲ前王ニクラブルニ、焉(イツクンゾ)同年ニ而(シ)テ語(イ)フ可(ベ)ケムヤ

△大慈恩寺三蔵法師伝・七・承德三年点▽

以上、イツクの入った数々の慣用句について述べて来た。これで、イツクに関する考察をひとまず終え、続いて、イツクについて、その意味・用法を、通時的にながめてみることにしよう。

三、イツコの用法

イツクは、すでに上代から一字一音書きの例が見られたが、イツコは中古になって初めて現れた語である。したがって、イツクの方が古く、その第三音節が母音交替してイツコとなったものと思われる。

ところで、このイツクとイツコは、平安時代では、ほとんどの作品で両方とも用いられ、しかも、その用法には大きな差が見られない。

まず、量的には、後に掲げる一覧表を見れば明らかのように、どの作品でもイツク・イツコが共によく使われ、その上、用例数にそれ程大きな差が見られない。また、意味的には、いずれもイツクのところで述べたような、「どこ、どのへん、どのあたり」の義で解釈することが出来る。次に、下に付く語について見ると、イツクの時に出来来た助詞のカ、ゾ、ト、ニ、ノ、ヘ、モ、ヨリ、ヲ、および助動詞ナリを伴うもの、その他、下に何も伴わない例などは、イツコの場合でもしっかり使われている。むしろ、イツコでは、イツクに出て来なかった、左に記すようなナム、バカリ、ヤを伴う例が新しく見えてくる。

○そこはかと「いづこなむすぐれたる。あな清ら」と
見ゆる所もなきが
△源氏物語・匂宮△

○さびしく心ほそくうちながめつゝ、いづこばかりと
あけくれ思やる。
△更級日記△

○さて、かの院の女御の御惱いみじかりければ、法性
寺やいづこやとありかせ給つゝ、
△栄花物語・二五・みねの月△

右のような例が見えることは、イツコもまたイツコ同
様、広く使われていたことを意味している。結局、中古
では、イツクとイツコが併用されていたと考えられる。

ところが、中世に入ると、これまでと様相が一変し、
イツコは余り使用されなくなつて来る。例えば、私が調
べた限りでは、『平家物語』『保元物語』『平治物語』
『曾我物語』『義経記』などの軍記物語をはじめとして、
随筆文学の『方丈記』や『徒然草』、そして説話文学の
『十訓抄』、物語文学の『とはずがたり』、歴史物語の
『増鏡』、紀行文の『海道記』、抄物の『毛詩抄』『蒙
求抄』『中華若木詩抄』、キリシタン文学の『こんてむ
つすむん地』などには、イツコの例は一つも現れて来ず、
すべて、イツクばかりが用いられている。その他、中世
の「御伽草子」や「狂言」、そして、いわゆる天草版と

言われる『天草本イツボ』と『天草本平家物語』、さら
に近世の作品になるが、『きのふはけふの物語』『雨月
物語』にも、イツクだけが使われ、イツコは出て来ない。

大体、近世の作品、例えば井原西鶴や近松門左衛門の
もの、そして式亭三馬の『浮世床』などには、イツクも
イツコも用いられず、ドコが使われている。(注3)

右のように、イツコの出で来なかつた作品は多い。ま
た、イツコはたとえ使われていたとしても、イツクに比
べて、用例数の少ない作品が目立つ。例えば、『宇治拾
遺物語』では、イツク十五例に対して、イツコが三例、
『発心集』では二十対三、『東関紀行』では四対一と、
いずれも、イツクの方が数倍多く用いられている。

結局、中古になつて現れたイツコは、その当時こそ、
イツクと変わらず、盛んに使われていたが、中世・近世
になると、ほとんど使用されなくなつてしまつたと言え
る。続いて、最後に、イツク・イツコの比較考察をし、
この稿を締めくくりにしたい。

四、 おわりに

これまで、イツク・イツコを、別々に見て来たが、こ
こで、その用法を、比べながら検討することにした。

まず、イツク・イツコの使用状況を図示すると、左のようにならざるであらうか。

上代 中古 中世 近世

イツク

イツコ

右のうち、実線で示した部分は、その語がよく使われていたこと、点線は、余り用例数が多くないこと、何も書いてないところは、用例が見当たらなかったことを示す。イツクは、息の長い語であるが、イツコは全盛期がわずかに中古だけである。そこで、イツク・イツコの使い分けは、主にこの期の作品に用いられた両語の用法から推測せざるを得ない。その結果については、先に少し述べたとおり、イツク・イツコの間、特にこれといった使い分けは出て来なかった。それどころか、この二つは、その用法がきわめてよく似ていた。さらにその点について言及すると、例えば、イツクには、用例数が多いこともあって、いくつかの慣用句が見られることを述べたが、これが実はイツコの場合にも出て来ている。すな

わち、イツクの部分がイツコに変わっただけのイツコトモノシ、イツコヲハカト、イツコヲハカリト、そして訓点資料の、イツコニカ、イツコニカ、イツコソなどが左のように見えている。

○さがにのいづこともなく吹く風はかくてあまたになりぞすらしも
△蜻蛉日記・天延二年四月▽

○道いと露けきに、いとどしき朝霧、いづこともなく惑ふ心地し給ふ。
△源氏物語・夕顔▽

○長月の頃、いづこともなく失せさせ給ひければ、宮の内の人、いかにすべしといふこともなくて
△今鏡・四・ふちなみ▽

○今日過ぎばしまし物を夢にてもいづこをはかど君がとはまし
△後撰和歌集・恋・六四〇▽

○いづかたに求め行かむと門に出でて、と見かう見みけれど、いづこをばかりとも覚えざりければ、かへり入りて
△伊勢物語・二二▽

○かくうらなくたゆめて、はひかくれなは、いづこをはかりとか我もたづねん。
△源氏物語・夕顔▽

○王曰、爾(ナムチ)カ家八安(イツコ)ニカ在(ア)ル
△大唐西域記・六・院政後期点▽
○但問、脂那ノ僧八何(イツコカ)在(アル)ト

△大慈恩寺三藏法師伝・五・永久点▽
○焉(イツコ) 能ク筆ヲ措(ナケ)ム。

△大日経義釈演密鈔・長承点▽

右のように、慣用句化した語が同じように見えていることは、イツク・イツコが用法上、余り差がなかったことの証左とならう。

さらに、中古も末に成った、歴史物語の一つ『栄花物語』を見ると、左のような例が出て来る。

○今はいづくにてかと定めらるる程に、殿まゐらせ給へれば、宮御物語のついでに「ここに侍る人々のかうかうの事をし出でて、いづくにてかとなん申すめる」と聞えさせ給へば、「いなや、御堂よりほかにてはいづくにてか仕うまつらん」と申させ給へば

△栄花物語・一六・もとのしづく▽

右の場面は、供養をどこで行ったらいいかと評定するところで、これだけの短い文章の中に、イツクニテカが二回、イツコニテカが一回用いられている。同じ場所を指示し、「どこ」と尋ねているときに、なぜ、文中では位置的に近くにあるながら、イツクもしくはイツコの片

方だけを用いず、両方を使っているのであろうか。そこに何か使い分けがあるのかどうか探ってみたが、意味・語法・使用場所・位相などいろいろな方面から考えてみても、その違いは見出せなかった。つまり、イツク・イツコと書き分けているのは、非常に任意的であり、その点から考えても、両語はよく似た語だということが言えると思う。また、歌物語の一つである『平中物語』に次のような例がある。

○奈良と聞きては、いづくをいづくことか尋ねむ。

△平中物語・三三六▽

右の例も一文の中に、イツク・イツコを書き分けているのは、何かある法則の元に行っているのかどうか、調べてみたが、これまた、よく分からなかった。さらに、いわゆる慣用句ではないけれど、イツクとイツコが同一作品内で、とてもよく似た使い方をされているものにも左のような例がある。

○「いづくにかあらむ」とて、深き山にこもり給ひぬとありしは

△大和物語・四三三▽

○されど、いづくにかあらむといふことさらにえ知ら

ず

△大和物語・一六八▽

○弁「いと、あやしく。中の宮は、いづくにかおはしますらん」
△源氏物語・総角▽

○老女房「中の宮、いづくにかおはしますらん」
△源氏物語・総角▽

○「いづくへおはするぞ。自（みづから）対面して聞えんと思ふことのあるに、かしこくあひ給へり」
△宇治拾遺物語・一五ノ二二▽

○「我は京の人か。いづくへおはするぞ」
△宇治拾遺物語・一〇ノ一〇▽

以上、いろいろな視点から考えてみたが、イツクとイツコの使い分けは、ほとんど見出せなかつた。（注4）ところで、これまで言及して来なかつたが、イツクのク、およびイツコのコは、共に、場所を表す接辞である。そして、このクとコは、草体で書くと、よく似ていて、まさしく誤写の範囲に入る。したがって、イツクと書いてあったところが、もともとはイツコであったかもしれないし、または、その反対の場合もあり得る。実際、私が調べていた際に、本文によって、イツクがイツコにな

っていた場合もしばしばあった。（注5）そこで、イツクとイツコは書写の面からも紛らわれやすく、転写を重ねて行くうちに、変わって行った可能性も大きい。

最後に、十七世紀初めに成った『日葡辞書』をながめてみると、イツクとイツコが左のように出ている。

o Izzucu | イツク（何処） どこ、または、どの場所。

o Izzuco | イツコ（何処） 詩歌語。どこ。

注目すべきなのは、両方とも同じ意味で記されているのに、イツコの方には、「詩歌語」という注がつけられている点である。結局、十七世紀以前、すなわち中世後期には、イツコは口頭語としては用いられず、詩歌の類に使われていたことが分かる。そして、これは、今まで述べて来た私の調査結果とも一致する。

以上、イツクとイツコについての考察をひとまず終了する。調査不十分な面も多々あると思うが、最後に、両語が使われていた主要作品における用例数を、参考までに表示し、大方のご叱正を期待しつつ、筆を置くことにしたい。（注6）

イツクとイツコの用例数

堤中納言物語	源氏物語	枕草子	宇津保物語	蜻蛉日記	大和物語	伊勢物語	古今和歌集	作品名
四	三七	六	四四	四	七	一	二	イツク
五	四三	九	二二	六	二	二	四	イツコ

宇治拾遺物語	発心集	無名草子	とりかへばや物語	古本説話集	大鏡	栄花物語	狭衣物語	夜の寝覚	浜松中納言物語
一五	二〇	二	二〇	四	四	一四	一九	一一	一一
三	三	三	二	一	二	一六	二	一	八

注1 佐伯梅友、『万葉語研究』所収「みちのくはいつくはあれど」、昭和三十八年四月など

注2 『万葉集』巻五・八〇四の歌の「いつくゆか敷が来たりし」の「ゆ」は、上代にのみ見られる格助詞で、ヨリと同義のため、ヨリに含めて考えた。

注3 ドコは、古くは『将門記』（承徳三年八一〇九九ノ点）や『梁塵秘抄』『平家物語』などに、用例が見られる。

注4 古辞書類を見ると、イツクが『文明本節用集』イツクが『書言字考節用集』に見られるほかは、共に単独では掲出されていない。

注5 イツクかイツクかはっきりしないものについては、今回の調査では、一応底本に従った。

注6 底本としたのは、左に記すものを除いて、岩波書店発行の日本古典文学大系本である。

○宇津保物語・・・「宇津保物語 本文と索引」、

笹淵友一、笠間書院、昭和四十八年

○今鏡・・・「今鏡 本文及び総索引」、榊原邦彦

ほか、笠間書院、昭和五十九年

○古本説話集・・・「古本説話集総索引」、山内洋

一郎、風間書房、昭和四十四年

○無名草子・・・「無名草子総索引」、坂詰力治、

笠間書院、昭和五十年

○発心集・・・「発心集本文・自立語索引」、高尾

稔・長嶋正久編、清文堂、昭和六十年

○海道記・・・「海道記総索引」、鈴木一彦ほか、

明治書院、昭和五十一年

○東関紀行・・・「東関紀行本文及び総索引」、江

口正弘、笠間書院、昭和五十二年

○十訓抄・・・「十訓抄本文と索引」、泉基博、笠

間書院、昭和五十一年

○とりかへばや・・・「とりかへばや物語総索引」

鈴木弘道、笠間書院、昭和五十二年

○狂言・・・「大蔵虎明本狂言集の研究1〜8」、

池田廣司ほか、表現社、昭和四十七年〜五十八年

○中華若木詩抄・・・「中華若木詩抄文節索引」上

〜下、深野浩史、笠間書院、昭和五十八年〜平成

元年

○天草本平家・・・「天草本平家物語総索引」、江

口正弘、明治書院、昭和六十一年

○天草本伊曾保・・・「文禄二年耶蘇会版伊曾保物

語本文・翻字・解題・索引」、京大國語国文学研

究室、昭和三十八年

○こんてむつすむん地・・・「こんてむつすむん地

総索引」、近藤政美、笠間書院、昭和五十二年

○雑兵物語・・・「雑兵物語研究と総索引」、深井

一郎、武蔵野書院、昭和四十八年

○きのふはけふの物語・・・「きのふはけふの物語

研究及び総索引」、北原保雄、笠間書院、昭和四

十八年

○好色一代男・曾根崎心中・・・近世文学索引「井

原西鶴」・「近松門左衛門」、近世文学索引編纂

委員会編、教育社、昭和六十三年

○浮世床・・・「洒落本、滑稽本、人情本」、中野

三敏ほか、小学館、日本古典文学全集

なお、歌は「国歌大観」によった。